

現地を訪問して想うこと

岩手県被災地応援ツアー参加

■匿名希望■

東日本大震災。震災後1年半現在で、18,000人以上の死者・行方不明者、343,000人の避難者、136,000戸の仮設。震災後、宮城県在住の私の周りには、少なくない数の福島からの避難者・津波被災地からの転居者がおります。内陸部に住んでいても、ちょっと車を走らせれば各市町村に仮設住宅が立ち並び、津波被災地に足を延ばせば、そこに生活があったことさえ想像できない程、きれいさっぱり何もなくなった土地があります。今回、ツアー参加者数名から、仙台の街はなんともないんだね、と声をかけられました。一見落ち着いたように見えるまちの風景ですが、あの日以来、直接被害を受けた方々はもちろん、この地域に暮らす私たちの生活は変わりました。東北にあって、自分はどう震災と向き合っていけばいいのか、あの日以来のテーマです。

今回のツアー参加者の中には、17年前阪神大震災でご家族に被害を受けた方もいらして、その方の今に勇気づけられました。私たちは時代を超えて、同じような経験をされた方と気持ちをわかちあったり、被災経験地(者)のこれまでの歩みに前進へのヒントを見出すことができるのかもかもしれません。また、宿泊先では岩手県校友会の方々より、陸前高田・釜石での震災時の話を伺うことができました。震災を風化させないため、命を守るために、体験を他者に伝え、記録することの重要性は言うまでもありません。釜石の奇跡等の成功の裏にあるものを、自分の地域にどう取り入れ、子どもたちや次の世代にどう伝えていくのか。エネルギーの問題をどうするのか。小さな子どもたちの親としても、突きつけられた課題・問題は深刻です。ツアー参加者の中には、生活再建や原発について、国や社会に対してさまざまな形で働きかけや意見表明されている方がいらっしゃいました。諦めずに働きかける姿勢を、私たちも忘れてはならないと思いました。

全国の校友のみなさま、どうぞ東北のニュースに耳を傾け、関心を持ち続けて下さい。可能なら、是非一度東北の被災地に足を運んでみて下さい。そして、応援のお気持ちを形に！今回は同じく立命館校友で大槌さしこプロジェクトの鈴鹿さんもゲストとしておいでになりました。気持ちさえあれば、自宅にいながらにして、コンピュータのボタン一つで、復興支援できます。校友が関わる団体・商店等であれば、応援したいという校友もおられるでしょうから、関係諸者にはぜひ名乗りを上げて頂きたいです。

震災後のあの大変な時期から、これまで多くの方々が様々な形で東北を応援して下さいました。先の見えない状況の中で、応援にどれほど力づけられたかわかりません。この場をお借りして御礼申し上げます。また、今回は遠く関西からこのような企画を通じて復興支援にかかわって下さった立命館大学に感謝の意を表します。ありがとうございました。応援と、今回頂いた皆さまとのつながりを力に変えて、進んでいきたいと思えます。